

## 第十三章 デモの渦の中から

昭和三十四年九月中旬、岸内閣の最重要課題である安保改定問題が、デモの怒号と暴力沙汰の中で最悪の事態にむかつて突き進んでいた。

昭和三十四年の参議院選挙後の第三十三回臨時国会では、藤山外相が、ほぼ妥結に近づいている交渉の過程について説明を行ったが、野党は全面反対の態度を明らかにする一方、院外活動を強化し、十一月二十七日には、浅沼稻次郎社会党書記長を先頭に一万名近いデモ隊が国会構内に乱入し、警官隊と衝突して、双方で三百名近い負傷者を出した。

明けて三十五年一月には、岸首相を团长とする安保全権団が渡来し、十九日には「日米新安保条約」と「日米行政協定」が締結され、これを批准すべき第三十四回国会が三十五年一月三十日開会した。国会内の論議は条約内に記された「極東の範囲」と「条約修正権」等に絞られたが、これについては、自由民主党内でも必ずしも十分の合意がなく、論戦は、与党も含めて紛糾した。

なお、この間の三十四年九月に行われた社会党大会で、それまで日米安保の改定を是としてきた西尾末広元書記長が除名され、西尾らには、その後離党した河上丈太郎らと合流して、三十五年一月民主社会党（民社党）が結成された。

院内に多数を持たぬ野党は、院外活動に全力を傾け、また、全学連が、独自の過激な反対デモを展開するなど世の中は騒然たる雰囲気に包まれた。四月に入るとデモはますます激化し、しばしば全学連の学生が機動隊と激突して流血の惨事をひきおこした。

野党側の抵抗により、新安保条約の審議は遅々として進まず、また与党内反主流派の三木・松村・石橋・河野派は、会期を延長して慎重審議すべきであり、警官導入による強行採決は避けるべきだと主張して、岸内閣の足元をゆさぶった。

日米修好百年祭を記念するためのアイゼンハワー米大統領の訪日は、六月十九日と決まった。政府は、それまでには何としても条約を成立させておきたいと考え、五月十九日、衆議院安保特別委員会が強行採決を行った。そうすれば、参議院で批准しない場合にも、一カ月で条約が自然成立するからである。これを怒って本会議場とその付近を占拠した社会党の議員と秘書団を、清瀬一郎衆議院議長は警察官五百人を動員して排除したうえ、本会議を開催して、野党欠席のまま会期五十日の延長を議決した。ついで二十日未明、自民党は、新安保条約を強行採決したが、与党反主流派二十六名も、野党に同調して欠席した。憤激した全学連は装甲車を乗り越えて首相官邸にまで乱入した。

これが、反米、反安保闘争から、岸内閣打倒、アイク訪日反対闘争への曲り角となり、野党は、マスコミの支援のもとに会期延長、単独採決無効を声明し、政争の舞台は完全に院外に移った。争点が「安保」から「民主主義」に移行するとともに、国会周辺は連日デモ隊によって埋められ、騒然とした空気が都心を包んだ。池田は、岸首相の政治手法には批判的だったが、新安保条約は日本外交の根幹をなすという判断から、新安保が成立するまでの一カ月間、窮地に陥った岸内閣を支持しつづけた。六月十二日には、アイゼンハワー米大統領が極東旅行に出発し、同大統領の訪日受入れが可能かどうか、問題はこの一点にかかってきた。

息づまる緊張の中で、六月十五日夕、国会構内に突入した全学連が警官隊と衝突して、双方に多数の負傷者が出た。デモ隊はもはや社会党や共産党の統制のもとにはなく、暴動的雰囲気醸成された。そうした混乱の中で、一人の女子学生が死んだ。

事態の処理をめぐって閣議は紛糾したが、翌日午後、岸首相はついに米大統領の訪日延期要請を提案、閣僚二名の反対をのぞいて、それも止むなしとの結論になった。この時点ですでに、岸首相は退陣を決意していた。

新安保条約は六月十九日に自然成立し、二十三日外務省で批准書交換が行われて、発効した。その朝、岸は政府・与党会議で辞意を表明した。

本来ならば、わが国の立場を有利にし、日米関係を対等の方向に進めるはずの新条約が、革新陣営から改悪と受けとられただけでなく、最後には三十万人に及ぶ大デモに発展して、岸内閣の生命を断つにいたったことについては、国内的、国際的にさまざまな要因があげられるであろう。大平は、昭和四十一年になって、この点について、次のように総括している。

「この騒動は、そのタイトルが示すような日米安保条約改正の是非をめぐる論議からいつの間にか大きく逸脱して、保守対革新、さらには治者对被治者の在り方を問う一大政治運動の性格に変わってきた。長期にわたる戦争と敗戦のもたらした物質的困窮からようやく立ち直ってきた日本国民は、自らの精神にある種の渴きと空虚さを覚えてきた。そして占領政治とその衣鉢を受け継いだ保守政治に、抵抗意識とも倦怠感とも判じ難い反発と不満を感じるようになってきた。この渴ききつた空気を、左翼勢力が黙って見逃すはずはなかった。たまたま岸政権が、安保条約の改正 それほたしかに安保体制下における日本の立場にある程度の自主性を盛り込み、国民の精神的空虚を少しでも埋めようと目論んだ善意のものであったのだが、を企図

するに及んで、彼等は巧みに安保条約の改正をその改悪にすりかえ、さらには、これを国民の渴ききつた精神的渴望感に対する点火剤に転用して国民を安保体制打破へ、さらには保守政権の打倒へ駆り立てたのである。しかもそれは、中ソ両国の対日政策の執拗な展開と相呼応して大規模に展開された。安保騒動の舞台裏には、そういうカラクリが、半ば公然と仕組まれていたのである」。

岸首相が引退を声明した以上、後継総裁の選挙にとりかからなければならぬ。

池田派はあげて、池田総裁擁立に立ちあがった。しかし、総裁選出の方式がなかなか決まらなかった。岸、佐藤の主流派は、安保改定問題の処理について岸政治に批判的だった三木、河野派を締めだした上、岸、佐藤、池田、大野、石井の五派連合政権をつくろうと画策し、公選は後にシコリが残るからとして話し合いを主張した。池田、大野、石井の三候補はいずれも公選論に固執して、譲る色を見せない。そして、大野、石井の両派は「池田支持」を示唆した吉田元首相の言動や池田派の高姿勢に反発し、連合戦線を結成することになった。

この間、岸首相自身は特定候補を推さず静観の態度をとっていたが、早急に党内調整を終わるよう要請した。

しかし、結局、話し合いによる調整は困難との見通しが濃くなり、各派はいっせいに公選の姿勢を固めた。八日、川島幹事長も岸首相に対し「公選のほかなし」と報告し、その諒承を得た。

公選と決まったものの池田派の派内には公選の経験者が誰もいない。困った大平は、前回（昭和三十一年十二月）の総裁公選時、佐藤派の参謀として岸陣営の一角を担った田中角栄に相談をもちかけた。田中は、池田の遠縁にも当たり、池田のもとにしばしば出入りしていたが、その関係からこの頃には大平と親しいか

かわりを持つようになっていたのである。

「……一、二、三日のうちに、田中君から数ページに及ぶメモが届けられた。そこには総裁選挙に関する政策の大綱はもとより、具体的な運動のやり方や予算までが青インクで、重要なところはわざわざ赤インクでしたためてあった。私は田中君の親切を多とした。

早速そのメモを携えて、私は池田さんを訪ねて説明したところ、池田さんは極めて不機嫌で、ただ一言「ビター文、金を使うようなことは相ならん」といわれるのであった。私は「わかりました。どこまでご期待に沿えるかわかりませんが、できるだけご意向をくんでやってみます。ただこの選挙は、われわれ同志の責任でやらして頂きたいと思います。できましたら貴方は、一切介入されないようにして頂きたい」と申し上げ、事実またその通り実行した」。

九日、池田、大野、石井、松村が、十日、藤山があいついで立候補の意思を表明した。佐藤蔵相は池田支持にふみきり、岸派は自由投票でのぞむことになった。

『朝日新聞』（昭和三十五年七月十日付）によれば、池田の立候補声明は次のとおりである。

「わたくしは、五月中旬からの混乱の事態が、わが国の社会秩序をゆるがし、日本の国際的信用をそこなったことに深い反省をしている。このような事態を一日も早く是正し、自由で豊かな日本を築き上げることは、われわれに課せられた急務であると考える。

わたくしは自主的発展的な日本建設のためには次の六項目の実施をはからなければならぬと信ずる。

(一) 議会政治の再建「そこなわれた議会政治と、政治家に対する信用を回復し、なによりも反対党に対する寛容と忍耐の精神が必要であることを深く銘記する。

(二) 社会秩序の確立「治安の根底は人の心にあると信ずる。人心の安定と相互の信頼感が社会秩序の根源で

あり国民に信頼される政治を行うことが先決要件だと思つ。

(三) 国民生活の向上と社会保障の拡充「まず、国民総生産を十年後に二倍以上にすることを政策の目標として掲げる。あらゆる階層の所得水準を高め、とくに農業と商工業との間、あるいは大企業と小企業の間、ならびに各地域の間にある所得の開きを、国民経済の成長の過程において解消し、全国民の生活水準とその内容を、先進諸国に劣らない程度にまで向上させるために、精力的に建設的な措置を講じたい。他面、社会保障を拡充して、不幸不遇の人々にも、社会繁栄の喜びを分けるよう努力する。

(四) 文教の刷新「私は施策の重点を文教に置き、思い切つた財政的裏づけのもとにその刷新と充実をはかり、とくに科学技術の画期的振興と、これからの日本を背負う青少年を健全に育てることに力を入れたいと思つ。

(五) 平和で自由な協力的国際関係の樹立「真の国際平和は、相互の理解と信頼と協力の上のみ成立する。このゆえにわが国は自由陣営からは信頼され共産陣営からは畏敬されることによつて、はじめて平和と自由な国際協力の基盤を保つことができるが、このような目的を持つ日米安全保障条約が、二の隣邦から疑いの目をもつて見られるばかりでなく、国内でもこれについての疑惑と反対のあることをきわめて遺憾に思つ。

(六) 党風の刷新「まず党内に民主主義を確立し、人事の適材適所主義に徹底することによつて、さわやかな新風をわが自民党に吹きこむことを当面の使命と考えている」。

文体から見ても構成から見ても、これはまぎれもなく大平が起草した文章である。

同じ紙面には他の四候補の声明も掲載されているが、池田のように政策を正面にかかげた文章はどこにもなかった。

ここで注目すべきは、反対党に対する『寛容と忍耐』が記されていることである。この言葉の出所については、これまでいろいろな見解が述べられてきたが、昭和二十七年六月四日付の『朝日新聞』香川版によると、大平は記者の質問にこたえて、「狭い国に住んで行く以上『寛容の精神』が必要ですよ。『寛容の精神』

が……」と語ったと記されている。

それはともかく、池田派は公選の日の五日前から赤坂のプリンスホテルに選挙事務所をかまえ、手分けして、支持者の獲得に奔走した。

大平は書いている。

「……新聞記者等による取材活動は、昼夜の別なく展開され、事実と虚報は複雑に交錯して、神経戦はいよいよ激しくなってきた。しかし、各議員や代議員が誰を支持するかは、大部分は予め見当がついており、工作の対象になるものは比較的少人数であった。そしてその目標はどの陣営においても不思議と一致しておるようだ。いわばこの少人数のために天下が大騒ぎしなければならないことになるのであるが、『少数』をどう納得させるかということが、元来、民主主義の支払うべき代償であるのだからやむを得ないことであった」。

池田派の台所をあずかつて、実質上、事務総長的な役割を負った大平の基本的な作戦は、まず、大磯の吉田のバックアップによって佐藤派の支持をとりつけ、それをテコに岸派を動かす、一方、藤山、石井、三木派などの中で池田との提携を望む票を吸収しようというものであった。佐藤派内には、『同僚の池田を推すよりも、旧自由党中間派で、柔軟な石井を支持した方が佐藤政権への近道だ』という意見も多く、大平の佐藤派工作の苦心もそのへんにあったが、佐藤派の参謀田中角栄の協力を得て、佐藤の池田支持をとりつけることができた。もつとも、この裏には、『池田が二期やれば、あとは佐藤に渡す』という暗黙の諒解があったと言われた。

池田強しと見た大野、石井両派は、大会前日の十二日に見込み票をつき合わせ、情勢を分析した。その結果、大野が決選投票に残った場合でも、石井支持票のかなりの部分が池田に流れると判断し、あくまで池田政権を阻止するためには、候補者を石井にしぼるほかないという結論に達して、大野は立候補を辞退するこ

とにした。「はしなくも選挙戦は『官僚派』と『党人派』の争いともいっべき様相をおびてきた」と大平は書いている。ここに党人派、官僚派というのは、自民党結成後、ようやく確立されてきた派閥の性格づけに起因するものであり、その派閥の領袖の前歴が党人が官僚かによって名づけられていた。

結局十三日は、党人派が産経ホールでの党大会に出席せず、その日は、議長を選んだだけで散会した。

最後まで態度を明らかにしなかった岸派は、この新事態を協議した結果、これが河野、三木両派の策謀にあるものと見て、各派に分散していた同派議員を総引揚げし、池田支持に回ることに決した。また派の存在を明らかにするため出馬する藤山も、決選投票では池田を支持することになった。

十三日、党大会が流れた後も、各派の活動はつづいた。

「……私は産経ホールの一室で池田、佐藤の両氏に呼び出され、『これから直ちに三木武夫君に会い、当方に同調するよう要請してこい』という命令を受けた。早速、三木さんの所在を確かめたところ、丸の内ホテルの七階にいたことが判った。そこで私は直ちに丸の内ホテルに行ってみると、全館はむんむんするようなこった返しの状況であった。あえぎながら階段を上って七階にたどりついたところ、部屋の前には塚田十一郎、灘尾弘吉、稲葉修等の各氏がいて、『今この部屋では、石井、大野両氏を中心に河野、三木、松村等の各氏が集まり、重要な会議が開かれている。どうしても三木さんに会わずわけにはいかない』といって断られた。それにあたりは、最早、石井内閣ができたかのような気配で、『おめでとう』という挨拶までが、すでに交換されている有様であった。私はふと、『その二、三日前にNHKで対談したとき、塚田さんが『大平君、戦いは最後の五分間だよ』といわれた言葉を思い出していた。

頼みの三木氏に会うことができなかった私は、埃だらけの非常階段を降りて、産経ホールに引き揚げた。党大会の会場には、最早人影はなかった。



産経ホールに帰った大平は、ホールへつづく大きなゆるやかな階段を飄々と歩いている椎名悦三郎に出会った。大平があいさつすると、椎名は言った。

「オレにはどうもわからんことが起こっているな」。

「わからんとは……」。

「党人派連合と言っけれど、北京と台湾が一緒になっているのはどういふことだ」。

大平は事務所引き揚げる車の中で、この椎名の言葉の意味するものをじっと考えた。おそらく椎名は、松村や三木らの親北京派と石井や大野の親台湾派が合流したが、一皮むけば、政策的にも矛盾があり、まだしつくり行っていないということを示唆したのである。そこで大平は、時をかければ党人派が固まると見て、速やかに大会を強行しなければならぬと感じた。

当時の池田の秘書の一人は、この夜の池田邸の様子をこう描写している。

「公選が一日延びた夜、信濃町に帰っていると、大平がきた。その大平に、安岡正篤氏から電話がかかってきた。

「池田さんは、あす総裁になるだろうが、けっして高びしやな態度にててはいけない。自分の責任でこいう事態をまねいたと、できるだけ謙虚な態度でのそまれるのがいいと思う」

大平は、「大臣、やっぱりあすは、低い姿勢でやってください」と言った。池田は「よしわかった」と言う。われわれはもう勝った気持ちだった」。

党大会は十四日午前十時、日比谷公会堂で開かれ、総裁公選が実施された。結果は次のとおりである。

#### 第一回投票

池田 勇人 二四六票

石井光次郎 一九六票

藤山愛一郎

四九票

## 決選投票

池田 勇人

三〇二票

石井光次郎

一九四票

こうして池田新総裁が誕生した。

再び大平の回想に戻る。

「七月十四日の夕刻、総裁の地位についた池田さんに、私は『とうとう貴方も総裁になられましたね』と申し上げた。池田さんは感慨深そうに『うん』と答えられてしばらく沈黙が続いた。次いで私は、『貴方は東京に出てこられた当時、何時の日か今日の地位につけるものと思っていましたか』と重ねて聞いたみた。もちろん池田さんの答えは『否』であった。さらに私は『本来、期待していなかった地位につかれたとすれば、現在与えられた地位におられることが如何に短くとも、文句のいいようもないわけですね。極端に言えば、朝に組閣して、夕べに倒れても已むを得ないのではないのでしょうか。また政権担当を何時まで許されるかは、国民が決めることであつて、貴方がお決めになることではないと思ひます。ついでにはこの際、一つお約束を願ひたいことがあります。それは、貴方ならびに貴方の周辺の者の間においては、長期政権という言葉や絶對の禁句にしていたいただきたいのですが』と詰め寄つたところ、池田さんは素直に『その通りだ』と応えられた。

次に私は『総理総裁たる方は、徹底的に庶民になりきつていただかなければならない。庶民と隔絶した意識と生活の中からは、庶民の納得のゆく政治ないしは庶民の協力が得られる政策は生れてこないと思ひます。飽食暖衣、自らは安逸を貪りつつ、国民に向つて耐乏や節約を求め、国民の努力を要求しても、それは空念仏になることでありましよう。ついでには、この際、さらにお約束願わなければならぬことは、総理在任中

はまず第一にゴルフを慎まれること、第二にお茶屋への出入りを自粛されることであると思いますが、お約束していただけますようか」と進言した。これに対しても池田さんは素直に「そうしよう」と答えてくれた。

十五日、池田は満枝夫人だけを連れて、箱根仙石原に落成して間もない箱根観光ホテルに赴いたが、翌朝、大平と秘書らがこれに合流し、十七日に山を降りるときには、組閣の大綱は決定していた。大平が内閣官房長官となることはここで決まっていた。

人事構想の中で一番問題になったのは、幹事長の人選である。池田は箱根に行く前に、大磯に寄って吉田元首相に総裁就任のあいさつをしたが、この時、吉田は内務官僚出身の山崎巖を幹事長に推薦した。しかし、この人事には、池田派内から猛烈な反対が出たので、やむなく、池田は、大御所の益谷秀次を幹事長に据え、総務会長には佐藤派の保利茂、政調会長には岸派の椎名悦三郎と三派の主流派体制が決まった。

十八日には池田の首班指名がおこなわれ、ただちに組閣がはじまった。閣僚候補の原案はほとんど大平がつくり、池田がそれを修正した。第一次池田内閣は、スピード組閣だった。閣僚は、小坂善太郎外務、小島徹三法務、水田三喜男大蔵、荒木万寿夫文部、南條徳男農林、石井光次郎通産、南好雄運輸、鈴木善幸郵政、石田博英労働、橋本登美三郎建設、そして厚生には、これも大平の発案で、紅一点の中山マサが起用された。

こうして出来た新内閣の特徴は、戦後に政界に入った、いわば戦後派の池田が首相になった点で、それ以前の前首相とは世代を異にしていた。このためもあって、比較的若手が多く登用され、石井以外は派閥の領袖は入閣しなかった。女性の入閣も日本の近代政治史上初めてのことである。

そして、大平正芳五十歳、それまで池田のかくし玉として、大臣はもろろん政務次官にもならなかった彼は、いよいよ政界の檣舞台に出ることになった。